

昔から熱田は市民の台所

熱田魚市場 1900年の歴史があるとされる熱田神宮や、今から1500年頃前に作られたといわれる数々の古墳を目にすると、熱田にはとても長い歴史があると感じます。

それに比べればずいぶん最近のことにも思えますが、海に面していた熱田には以前から魚市場があり、古くは織田信長の居城があった清須にも魚介を運んでいたとされているそうです。



熱田の浜の夕上がり魚市（尾張名所図会
提供：名古屋都市センター 着色）



熱田魚問屋モニュメント（大瀬子町）

現在、宮の渡し近くの大瀬子公園にはかつて旧魚問屋として使われていた建物の保存部材を活用した「熱田魚問屋モニュメント」が設置されており、魚問屋の面影とともに地域のにぎわいを支えた歴史を伝えています。

現代の“熱田魚市場”：中央卸売市場 現代の熱田区には、鮮魚や野菜・果物などが全国から集まる名古屋市中央卸売市場の本場（ほんじょう）があり、昭和24年の市場開設以来、市民の皆さんの食生活を支えています。

名古屋市では3つの中央卸売市場を開設していますが、2つは西春日井郡豊山町（北部市場）と港区（南部市場）にあり、この本場だけが市街地にあります。なぜ、熱田区の堀川沿いに大きな市場を開設したのでしょうか。

大正時代には、熱田魚市場をはじめ枇杷島、西柳町、下之一色町など名古屋には13の市場があったそうです。時代が進むにつれ市場も集荷の利便性確保や規模拡大などが求められ、全国の主要な都市では中央卸売市場が整備されていきました。

熱田に市場が開設されたのは、鉄道が近くをとおり水運の利便もよく、熱田魚市場の歴史があり、沼沢地帯を埋め立てて広い場所が確保できたことも要因だったのではないのでしょうか。



銘板「中央卸売市場と白鳥線」（西郊通）

現在の中央卸売市場は、マグロに代表される太物（ふともの）やヒラメや鯛、アジやイワシといった鮮魚、ちりめんや干物といった塩蔵品、それに旬の野菜や果物を一定の温度管理のもとで品質を保ちながら取引できる卸売場や冷蔵倉庫棟を備え、衛生的な生鮮食料品流通を可能としています。

中央卸売市場本場は、開設以来70年以上にわたって、生鮮食料品流通事業者の集積地として、市内はもとより三河地方や近隣県などこの地域の食生活を支えており、長年かつての熱田魚市場が果たしてきた歴史的役割を、受け継いでいるとっていいかもしれません。

売り手も買い手も開設者である市長の許可・承認を受けて業務を行っている中央卸売市場ですが、どなたでも市場のウェブサイトから見学を申し込みすることも可能です。また、市場の西側にはどなたでも買い物ができる場外市場（名古屋食品卸センター）もありますのでお買い物も楽しみながら一度足を運んでいただき熱田の歴史に思いをはせてみてはいかがでしょうか。